25　なぎなた踊り

指定　　昭和 55 年 3 月 31 日　　町指定無形民俗谷文化財
所在地　麦生

麦生なぎなた踊りなぎなた踊りは、貞享 3 年（1686）ごろ、宮崎より来島した大山仲左衛門によって伝承されたといわれているが、宮崎県の綾町に伝わるなぎなた踊りとは、歌詞・踊り共に違うことなどから、事実のほどは定かでない。また、種子島から移住した「シンドンモンドン」によって伝えられたという説もあるが、これもまた定かでない。

なぎなた踊りは、従来、盆踊りと呼んでおり、昭和 50 年代以降なぎなた踊りと呼ぶようになった。

『岩川畩之助日誌』に、「先祖代々伝イ来タル、盆祭ノ奉納踊リ昨年マデハ、男女、子供二無事奉納踊リ致セ共、本年（明治）四五年度ハ、天皇陛下崩御ノ為、盆踊り致サズ」と記されている。このような記録からみても、起源は古いものと思われる。戦中戦後の一時期中断されたことがあったが、昭和 24 年頃復活して現在に至っている。

なぎなた踊りには、手踊り・棒踊り（センセン棒）・なぎなた踊りがある。歌は 1「松は」、2「真実」、3「カレヨシ」、4「シイー」、5「ヒイヤアヨイ」、6「金ちゃん」の 6 曲に分かれている。「松は」（手踊り）は、祝い歌と思われる。「真実」（手踊り）は、歌舞伎役者の市川団十郎の名前や、篠田ヶ森に住んでいた女狐の恋の物語である。「シイー」（なぎなた踊り）と「ヒイヤアヨイ」（なぎなた踊り）は、牛若丸と弁慶の京都五條の橋の上での出会いのくだりである。「金ちゃん」（手踊り）は、プロポーズの歌であり、「カレヨシ」（棒踊り）は、琉球民謡と思われる言葉が含まれている。これらの歌は、全体的に意味不明の歌詞が多く、昔から今に伝えられたそのままの歌詞なのか、永年の間に歪曲されたものか分からない。むらの古老に意味やその他のことについて尋ねても知っている人はいない。

明治 40 年代までは、男子のなぎなた踊りと、女子の笠踊りがあった。装束は、男子が浴衣に袴、紅白の襷に白の鉢巻、履き物は草履である。現在もこの衣装が受け継がれている。女子は振り袖姿に花笠を持って踊ったと聞く。歌い手 2 名、太鼓打ち 1 名がござを敷いて座り、その前に牛若丸役、左に弁慶役、右に 10 組ぐらいの踊り手が並ぶ。

以前は、青年団がこの踊りを取り仕切っていたが、昭和 50 年代に入り団員数が激減し、継承することが危なくなったので、高校生から 40 歳代の者を対象に保存会を結成し現在に至る。近年は女子青年も参加し、販賑わいを見せている。

踊りは、お盆の 13 日の夜に、村の中央で「松は」を踊り、お寺前の広場で一通り踊る。次は、15 日の早朝より海へ行き、海水で身を清め、朝から村の中央・お寺・弓矢八幡神社・正八幡神社・大山祇神社・海岸のエビス様 4 ヶ所・目の神様（高平）・墓地の順に踊り、最後に「ニワモドシ」を村の中央で踊るまで、一日中奉納踊りをする。